

魂の格闘における救いの歴史の回顧と主を求める祈り

まず、詩編 77 編を祈りつつ読んでみよう。「エドトン」はレビ人でダビデ時代音楽長に任じられた。歴代誌上 16:41 を参照。エドトンは「礼讚」という意味で、「主の慈しみはとこしえに」と主に感謝の交唱をするために選ばれたと言う。

3 節前から信仰者の呻き、嘆きの詩が続いているが、2 節は格闘の結論の先取か、前提か、「神に向かってわたしは声をあげ/助けを求めて叫びます。神に向かってわたしは声をあげ/神はわたしに耳を傾けてくださいます。」で始まる。修辞学的な文章であることもあり心に残る。時制を過去と翻訳してもよい。「わたしの言葉で (qōwlî) 神に呼ばわった。わたしの言葉で神に。そして、神は私に耳を与えた。」苦難に直面した際の祈りと願いは簡単には聞かれ、癒やされず、悩みは解決していない (3-4 節)。これが信仰者の日常なのであろう。しかし、叫ぶ相手がいることは幸いである。信仰者は「いにしえの日々 (過去に)」(6 節、12 節) 主が慈しみ、憐れみを示され、御腕をもって御力を示し、贖われたこと (15-16 節) を回顧・熟考する。救済史の回顧こそ祈り・願いの動機であり、根拠である。11 節では「いと高き神の御手は変わり/わたしは弱くされてしまった」と語られ、神を「隠れた神」(deus absconditus イザヤ 8:7、45:15) のように感じていた詩人の姿がある。神の変化を知らされているという。しかし、神はご自身を隠しながら現わす神であるから、詩人は、17 節以下救済史 (創造、紅海渡渉) を歌い、21 節には「あなたはモーセとアロンの手をとおして、羊の群れのように御自分の民を導かれた。」と結論的に述べる。聞かれないように見える祈りは実は聴かれていたのである

1. 苦難に直面して (2 節~4 節)

詩人は私の「苦難」「困難」の日に (特定の日)、「主人」('adōnāy) である神を探し求めたという。暗い夜、不安の中で、私の手は (単数) 休むことなく伸ばされたが (神に向かってか?、闇に向かってか?)、私の「魂」は慰められるのを拒絶されたと告白している。藁をも掴みたい心境であったのだろう。しかし、取りつく島もなかった。「神を思い続けて呻き、私の霊は悩んでなえ果てます。」「私は神を思い出し続けました。そして、困難の中にあり、不平不満・文句を言い、わたしの霊は (不信に?) 飲み込まれてしまっていました、と歌う。

悩みの描写はさらに続く。「あなたはわたしのまぶたをつかんでおられる。」目を閉じようとしても悩みが深く、眠れないとのことか? 心が波立ち、落ち着かないが自分の想いを表現する言葉が見つからない。話すことができない (失語症?)。それでも「わたしの霊は(悩んでは原語にはない!) 思い続け (zkr、4、7 節)、神に「問いかけます。」夜、心の内に讚美歌を「思い起こし」、「黙想」しながら。しかし、ここでは絶望の中に「問いかけ」が起こっているのではないか!

2. 自らを啓示し、また隠す神 (5 節~11 節)

ルターは自分の霊の格闘からイザヤ 8:7、45:15 より「神はご自分を隠しつつ現わし、現わしつつ隠す神」であることを知った。詩人には闇の経験がなお続くが、真っ暗闇ではない。「いと高き神の右の御手は変わり、わたしは弱くされてしまった。」口語訳「わたしの悲しみは、いと高き神の右手が変わったことである。」神が変節した! いや、変わったのではない。無力に見える神、ご自身を隠す神は全

能の神であり、自らを現わすお方であるのだ。神顕現の出来事は「あなたの踏み行かれる跡を知る者はない。」(20 節)と言われ、神とその業は、人知を超えた見えない世界の事柄なのである！その片面しか見えないのが人間なのである。それが「変わった」と思う所以であろう。「主 ('adōnāy) はとこしえに突き放し、喜び迎えてはくれず、主の慈しみ (hasdōw) は永遠に止んでしまい、彼の語り ('omer) は代々失われたのか」、「神は憐れみ」を忘れ、怒りにおいて、彼の優しい恵みを閉ざされてしまったのか！」と嘆いている。しかしどん底とも言うべき 11 節が転換点になっているのかも知れない。もし、神が変わったのであれば、人はそれを受け入れざるを得ない。一切のご利益信仰からの解放である。

3. 神の救済史への回顧 (12 節～16 節)

12 節では主 (yāh) の諸々の御業を「思い続け」、確かに古き奇跡を「思い続け」('ezkārāh)、(神の) あなたの働きのすべてとあなたの行為とを「思い巡らす」(wəhāgītī 黙想する。)と告白する。考えてみれば、「神よ、あなたの聖なる道を思えば、あなたのようにすぐれた神はあるでしょうか。あなたは奇跡を行われる神、諸国の民の中に御力を示されました。御腕をもって御自身の民を、ヤコブとヨセフの子らを贖われた」としか言いようはないのだと告白する。神は「聖なる神」であり、その道もまた俗なる人間を超越した「聖なる道」である。ここでは、南ユダへの言及がないので、この詩編はあるいは北イスラエルの神信仰の伝承か？「聖なる道」は「聖所であなたの道を」思うとも翻訳可能である。「あなたのようにすぐれた神」は直訳すれば、「(私たちの) 神のように、非常に偉大な一人の神 ('el)」となる。「あなたは神、不思議なことを行い、諸国民の間であなたの力を宣言された。」あなたは、あなたの民、ヤコブとヨセフの子らを「贖われた」と告白している。

4. 基本的救済史 (17 節～21 節)

神への賛歌は、天地万物を創造し、大水を制御して秩序を与えた創造の行為 (17 節)、雲や稲妻による被造世界の脅威 (18～19 節)、そして、モーセとアロンに導かれたエジプト脱出と紅海渡渉の出来事 (20 節～21 節) からなっている。私たちはこの救済史に、イエス・キリストの歴史を加えることができる。父なる神は聖霊によってみ子イエスをこの世界に派遣し、み子は神の国を宣教し、貧しい者を招き、病いの者を癒された。その徹底的な愛神愛人の姿勢と存在がこの世界で自分の義を建てようと思う人々に躓きを与え、み子は十字架で殺された。しかし、父なる神は聖霊によってみ子を死者の中から引き上げ、愛といのちの支配者として父の右に即位させた。このようにヘブライ語聖書と新約聖書が証言する三位一体の神は、歴史に働き、教会を形成し、その救いの業をかの日完成されるであろう。